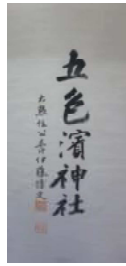




江山焼 山姥金時之像
明治41年12月、横江山は伊予稻荷神社に奉納



伊藤博文郡中来町 明治42年3月26日、郡中停車場下車、人力車で歓迎会場の彩浜館に向かう。寒風吹きすさぶなか、彩浜館横の広場で歓迎会を開催。歓迎の言葉を町長豊川渉が述べる。博文は、五色濱神社と湊神社の社号を絹の布に書く（写真は五色濱神社蔵、伊予稻荷神社保管の博文の書）。江山焼抹茶茶碗に「水光山色沙白松青影裏之人家」の13文字と、博文の雅号「春飲山人」を揮毫（きごう）



三島焼 明治42年三島陶器は隆盛 伊予陶器同業組合を設立

明治42年頃 伊予かすり業は隆盛
明治43年 郡中銀行は五十二銀行に吸収合併
明治44年 伊予農業銀行は灘町に社屋を新築し、湊町の郡中支店を新社屋に移転。その建物が、現在の郡中まち元気サロン来良夢（こらむ）。この年、郡中に公衆電話ができる

郡中の明治期に地域の発展に尽くした人達

一平成29年4月2日、彩浜館で開催された郡中二百年祭記念式典で、四人の先人に「郡中名誉町民賞」を贈呈させていただきました。



豊川 渉



宮内治三郎



藤谷豊城



横 江山

郡中の明治を訪ねる 展



明治という時代は、中世以来の行政の仕組みと身分制度が廃止され、第1次産業革命が同時に進行するという大激動の時代でした。文明開化の波に乗り遅れまいと、全国各地で地域発展のための取り組みが懸命にすすめられました。ここ、郡中の明治を訪ねてみました。

民力で築いた町 郡中のあゆみ

江戸時代前期、上灘村の商人宮内兄弟は、灘町を私財で開発しました。江戸時代後期に、3期24年の歳月を要し萬安港を完成させ、港の交易により町は飛躍的に発展を続けます。この時代背景のなかで、灘町に、仲田蓼村（なかたりょうそん）、陶 惟貞（すえいてい）、小谷屋友九郎（おだにやともくろう）という三人の有能な町人が期せずして現れます。活力がみなぎっていたであろう、郡中の町の雰囲気に影響されながら、この三人の才能は開花したと思われます。この人達により、俳諧、教育、郡中十錦が広まり、郡中町人文化を形成していきます。なかでも、陶惟貞は、1821年又は1822年から1872年までの50年間、灘町で寺子屋を開き、その間2千人の子弟に学問を教えています。陶惟貞による教育が、郡中方面の人材を育成し、これらの人的資源の質量と、港による資本の蓄積が明治期の郡中の発展を支えたように思われます。また、大正期に興った削り節業の発展の要因の一つは、事業所が郡中港の近隣に所在し、原材料の搬入や製品の出荷に郡中港を容易に利用できたという、立地の優位性にあります。

このように見ていきますと、砂浜海岸に自普請（民間が責任を持って行う事業のこと）で港を造ろうという無謀ともいえる挑戦が、民力で築いてきた特異な歴史を持つ郡中の原点であり、ここから生まれてきた風土が明治、大正、昭和前期の原動力につながったようです。



郡中市陌浜辺図

1854年（安政元年）、安政の大地震にみまわれ建物が倒壊し大きな被害を受ける地震以前の灘町の様子を克明に記録した絵図

郡中の明治 郡中方面の人達により、郡中港に堆積する土砂の浚渫や港の改修、私立郡中銀行の創立、彩浜館の建設、郡中巷衢創業原誌碑の建立、南予鉄道会社の創立と郡中一藤原（現土橋付近）の鉄道開通、伊予汽船会社による東京一鹿児島島の定期航路の開設、ロシア兵捕虜を郡中へ招待、伊藤博文公の郡中来遊など地域発展のための取組みが懸命にすすめられました。

1909（明治42）年頃、郡中方面で電灯の使用が始まっています。



萬安港灯台 明治2年
又は3年築造



住吉神社
明治4年、造営 港の方角に向けて建てられていました
明42年、天神社と合祀して五色浜神社と改称



私立郡中銀行創立記念写真 明治19年3月15日 県内私立銀行の内2番目に創立されました



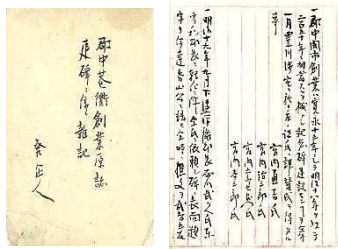
岡井寅五郎薬店 明治25年11月 湊町で創業



彩浜館 明治27年建設 町の急速な発展に伴い、郡中商人他の出資で建設された公会堂



郡中巷衢創業原誌碑 明治27年7月22日建立（郡中まちづくりの碑） 建碑発起人は豊川渉



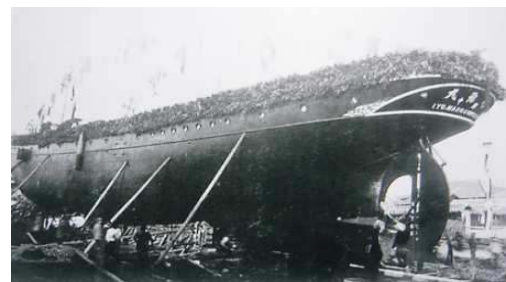
郡中巷衢創業原誌 建碑に係る雑記 豊川渉著 彩浜館の初めての使用は建碑祝宴会



推定 明治27年晩秋頃の碑



明治27年7月5日、南予鉄道開通の翌日に郡中停車場で記念撮影 軽便（けいべん）鉄道といってレール間は約76cm、一般の鉄道よりも約30cm狭く、後に坊ちゃん列車と呼ばれました
明治33年、南予鉄道は伊予鉄道に吸収合併 5月1日、伊予鉄道郡中線開業



伊予汽船会社の伊予丸（川崎造船所で建造）

明治28年、それまで長浜に本店を置いていた肱川汽船は郡中に本店を移し、伊予汽船株式会社と改称（資本金50万円） 社長は初代郡中町長を務めた宮内直吉 同29年伊予丸を新造して東京～鹿児島島の航路を開設 以前からの持船肱川丸（第1～第4）で大阪～日向～細島の航路を開設 いずれの航路も郡中に寄港 伊予汽船会社は経営上の諸問題により明治35年に解散しました

宮内直吉、宮内小三郎、宮内治三郎や郡中方面の豪商は郡中財閥と呼ばれ、その大方の人達は地域発展のための近代化事業に積極的に取り組みました 南予鉄道会社と伊予汽船会社の解散により、郡中財閥と呼ばれた人達の活躍は実質上終了しています 伊予汽船会社等の解散により、経済は混乱し、郡中の信用は失墜したと言われています 明治35年から第5代郡中町長を務めた豊川渉は、郡中の発展と信用回復に尽くします



伊予汽船会社の株券
明治29年4月30日



太田医院開業10周年記念写真 明治41年5月28日撮影 後ろの建物は、彩浜館



浄瑠璃公演記念写真 明治41年12月1日撮影 この頃、郡中商人の間で浄瑠璃が流行していました



天神社 明治42年まで、現在の灘町89-1、城戸洋品店の裏側一帯にありました